［絶句ー送別］

送元二使安西

王維

作者

王維

七〇一年頃（一説に六九九年）～七六一年。盛唐の詩人。字は摩詰。熱心な仏教信者で、「詩仏」と呼ばれた。唐代自然詩の第一人者。太原（山西省中部）の人。開元九（七二一）年、進士に及第。太楽丞に任ぜられたが、罪に連座して左遷された。開元二十三（七三五）年には張九齢に認められて右拾遺となったが、張九齢の失脚により、河南節度使の節度判官として涼州（甘粛省）に赴任。その後、監察御史となり、左補闕、庫部郎中にまで進んだが、母崔氏の死にあい、一時官を辞して喪に服した。喪が明けると、吏部郎中、次いで給事中となったが、安禄山の乱が勃発。玄宗の成都（四川省）避難に従うことができず、賊軍に捕らえられて心ならずも偽官（安禄山の朝廷の官職）に就かされた。乱後、重罪に処されるべきところ、当時刑部侍郎であった弟の王縉が、助命を請うたのと、賊軍の中にあって唐室の崩壊を悲しむ詩を作っていたことによって官職を下降されただけで許された。後、再び給事中となり、尚書右丞となって没した。早くから俊才をうたわれ、宮廷詩人として活躍する一方、終南山の麓、藍田（陝西省）の地に別荘（輞川荘）を営み、その自然を愛して閑雅の生活を楽しんだ。友人裴迪と唱和した「輞川集」がある。詩は、閑寂な自然を歌うことが多く、晋の田園詩人陶淵明、南朝宋の山水詩人謝霊運の流れを受けて、さらに新しく深い美の世界を創造した。唐代自然詩人の雄として、孟浩然・韋応物・柳宗元と共に「王孟韋柳」と称される。また、画にもすぐれ、南画の祖とされる。「王右丞集」がある。

出典

三体詩

六巻。南宋の周弼の編。唐の詩人百六十七人の近体詩を、七言絶句・七言律詩・五言律詩の三体に分類して収めている。中晩唐を重視して初唐はとらず、盛唐も李白・杜甫をとっていない。元の釈円至が初めて注をほどこし、「箋注唐賢絶句三体詩法」二十巻を作ったが、のち清の高士奇が補注を作った。我が国には南北朝時代に、中巌が入唐して伝えたといわれる。その後、禅僧の間で盛行し、注が多く作られた。江戸時代、一部の学者がこれを排斥したが、愛読者が多く、現在に至っている。「送元二使安西」は巻一所収。本教科書は、冨山房「漢文大系　箋解古文真宝後集・増註三体詩・箋解唐詩選」によった。

主題

朝の雨も上がり、柳の揺れる宿で、遠く西域に旅立つ友に、最後にもう一度だけと、別れの杯を勧める。

構成

第一（起）・二（承）句…渭城の宿では朝の雨も上がり、揺れる柳の緑もみずみずしい。（叙景）

第三（転）・四（結）句…「旅立つ君にもう一杯、酒を勧めよう。西域に行けば、君の友は一人もいないのだから。」（作者の元二に対する言葉）

〈詩形・押韻〉 詩形―七言絶句。　押韻―「塵」（第一句）・「新」（第二句）・「人」（第四句）。上平声十一・真韻。

訓読と現代語訳

①渭城の朝雨　軽塵を浥す
②客舎　青青　柳色新たなり
③君に勧む　更に尽くせ　一杯の酒
④西のかた陽関を出づれば　故人無からん

① 渭城の朝の雨は街道の土ぼこりをしっとりと濡らしてくれた。
② 旅館の辺りの柳は青々として、みずみずしい色を新たにしている。
③ さあ君よ、もう一杯この酒を飲み干したまえ。
④ 西に進み、陽関を出てしまうと、もう親しい友はいないのだから。

学習活動のポイント

学習活動のポイント

❶ 詩の黙読。その後、範読を聞く。その際、句中の切れ目に注意する。
❷ 一斉読み。その後、指名によって音読する。
❸ 詩の書き下し文を完成させる。知技(2)ウ

展開

❹正確に現代語訳する。〔**言葉と表現**」1〕
❺第一句から想起される情景を理解する。
❻第二句の表現の特徴を理解する。
❼前半に対して、後半がどのような特徴を持っているかを理解する。〔**学習のポイント**」1〕
❽詩中の地名を地図上で確認し、作者の思いを理解する。
❾詩形・押韻について確認する。

❶丁寧に範読する。中国で最も愛好された送別の詩であり、我が国でも詩吟等によって古来愛唱されている作である。そのことをあらかじめ断っておいてもよい。
❷できれば暗唱させ、きちんと訓読してその美しさを理解させたい。中国では古来、この歌に曲を付し、「陽関三畳（曲）」といっている。その歌い方には種々あったらしいが、一般には結句を三回繰り返す（「三畳」は、三回たたみ重ねる意）というものだったらしい。その形をまねて、結句を三回繰り返す等してもよい。
❸数名に板書させ、全員で検討する。
❹漢和辞典で引かせたい語句－「浥」「軽塵」「青青」「勧」「尽」
「故人」等。ことに起句の「浥軽塵」というのが、旅人にとって喜ばしく、出発を言祝いでいることを、辞書を引くことによって把握し、訳に反映させたい。
❺いよいよ旅立つ場面。塵も落ち、すがすがしい旅立ちとなりそうなこと。朝の旅立ちで、前夜のうちに送別の宴は終わっており、これが最後の別れの瞬間であること。以上のような点に注意させたい。
❻巧みな表現によって柳の美しさが捉えられていることに気づかせる。本来の言い方とは逆に柳の色を描いていることを、板書等で整理する。

《板書例》

〈日常語〉　客舎柳色青青　新
〈王維詩〉　客舎青青柳色新

❼後半で、情景描写から一転して、元二に対する語りかけになっていることを理解する。
　前半－情景を見て描いている。
　後半－作者（見送りの人）から元二への語りかけ。
　そこに、最後の瞬間に、友に向かって堰を切ったように語りかけようとする作者の思いが込められている。
❽単元扉の地図を利用する。ふり出しの出発地は、都長安（陝西省西安市）とし、「渭城」（咸陽）、「陽関」「安西」と、元二の旅する道順と位置を確認させたい。

発問例

● 一五〇ページ

問　**「朝雨」（第一句）という表現から、どういう場面か考えよ。**

答　朝早く降った雨が上がり、今しも「元二」が旅立とうとしている場面。

補　旅立ちは、朝である。軽く雨が降って上がったことが分かる。ことに次の「浥二軽塵一」という表現から、軽い塵をしめらす程度の小雨だったことが分かる。旅立ちには、ちょうど良い状態である。さらに、「元二」は官命によって「使」するのだから公用であり、前夜は、都の長安から、渭水対岸の「渭城」まで人々が見送り、その地の旅館で盛大な送別の宴があったと考えられる。「朝雨」とあるから、前夜の宴会で儀式上の挨拶は全て終わり、一夜明けて旅立つばかりであることが分かる。

問　**「浥二軽塵一」（第一句）とはどのような様子をいうのか。**

答　雨が降り、軽い土ぼこりをしっとりと湿らせている様子。

問　**この詩の季節及びその根拠となる語句をあげよ。**

答　季節＝春
根拠＝青青柳色新

問　**第二句の表現の巧みな点はどこか、指摘せよ。**

答　「青青」は、「柳色」を言っているのだが、その順序が逆になっている。そのことによって、「青青」としているものが何なのか一瞬分からず、次の「柳色」で鮮やかな柳の色が広がる。

補　平仄（平らな音と仄いた音の定型化した組み合わせ方）の決まりに影響されてこのような語順を選んでいるのだが、普通の語順を逆転させた新鮮な表現効果を生んでいる。普通の語順と対比して板書するとよい。「学習活動のポイント」参照。

問　**「勧レ君更尽一杯酒」（第三句）について、**
1　**「君」とは誰を指しているか。**
2　**なぜ「更尽」と勧めているのか。**
3　**◉「勧レ君」に込められた作者の心情は、どのようなものか。**

答　1 元二
2 別れを惜しんでも惜しみきれないから。
3 いよいよ別れの朝を迎え、友への離別の悲しみを抑え難い気持ち。

補　深い惜別の情にあふれていることを理解する。

問　**「西出二陽関一無二故人一」（第四句）について、**
1　**「西」はどこを基準にして西なのか、次の**

語句の研究

● 一五〇ページ

2 元二　王維の友人。伝未詳。「元」は姓。「二」は排行（一族同世代の兄弟・いとこなどの年齢の順位）を示す。したがって「元二」は、「元家の二男」の意。ただし、その「二」は、いとこなどを含んで数えることに注意。

2 安西　現在の新疆ウイグル自治区庫車県。唐代には安西都護府を置き、西域の防備に当たらせた。安西都護府は、唐王朝が西域経営の拠点とした役所。「元二」は、そこに「使」するというから、朝廷の命により、正式の使者として出かけてゆくのである。

3 渭城　現在の陝西省咸陽市。唐の都長安（現在の西安市）の北西、渭水を挟んで長安の対岸にあった町。唐代には西方に旅する人をここまで見送る習慣があった。旅立ちの前の夜には、この渭城において送別の宴会を開くのが通例だった。

3 朝雨　朝早く降った雨。「朝雨」の語によって、前日の夜に送別の宴が開かれ、今は朝の雨も上がっていよいよ出発するばかりだということが分かる。

中から選べ。

(ア)謂城　(イ)安西
(ウ)客舎　(エ)陽関

答 2

問 **「無二故人一」とはどのような意味か。**

答 1 (ア)
2 古くからの友人はそこにはいないだろうから。

問 **前半と比べて、後半の表現の特徴は何か。**

答 全て、作者の、元二に対する語りかけの言葉になっている。前半は情景の描写だったが、後半は会話体で、別れを惜しみ、元二の身を気づかう作者の、精一杯の直接話法となっている。

問 **この詩に表された作者の心情について、[難]A説明せよ。**
[中]B適切なものを次の中から一つ選べ。

(ア)友と一緒に旅行できないことを無念に思う心情。
(イ)遠く旅立つ友との別れを惜しみ、励ましている心情。
(ウ)遠く旅立つ友を見送ったという充実した心情。
(エ)友と永久の別れになることを悲しむ心情。

答 A遠く旅立つ友との別れを惜しみ、励ましている心情。
B(イ)

問 **一番共感する句はどれか。そしてそれはなぜか。**

答 どの句をあげてもよいが、その理由をはっきりさせて発表するよう指導する。ことに印象深いのは、承句の「客舎青青柳色新」という「青青」と「柳色」を逆転させた表現、結句の「西出二陽関一無二故人一」という砂漠地帯に一人向かう友を思う言葉等であろう。どの句を選ぶにも、その根拠を出して、分析しながら意見交換をさせたい。

問 **都長安を中心にして、「安西」「渭城」「陽関」などの位置を、地図の上で確認せよ。**

答 「渭城」が長安のすぐ対岸であり、「陽関」を出れば「安西」まで、タクラマカン砂漠を横断する命がけの旅だった。当時においてはきわめて危険な旅だったことを確認させたい。

問 **詩形・押韻を調べよ。**

答 「構成」参照。

---

3 浥二軽塵一　軽い土ぼこりを濡らしている。「浥」は、しっとりと濡らす意。「軽塵」は、黄土の微粒子が土ぼこりとなったもの。それが雨でしっとりと濡れているのは、雨が小雨だったことを示し、また旅立つ人にとっては、土ぼこりが立たずに歩きやすい状態となっていることを意味する。

3 客舎　旅館。はたご。前夜、送別の宴を開いた、その旅館をいう。

3 青青　あおあおとしている。緑が鮮やかなさま。「青」の文字自体の意味が、若々しい緑であるが、「青青」と重ねて、畳語（重言）の擬態語としても、緑の若々しさを形容する。

3 柳色新　柳の葉の色が鮮やかだ。雨に洗われた柳の緑のみずみずしさをいう。同時にそれは、旅立つ人に無事の帰還を祈って柳の一枝を折って贈る習慣を踏まえている。また、その習慣による古楽府「折楊柳（せつようりゅう）」が昔から歌われてきたことをも踏まえている。

4 更尽　さらに（もう一杯）飲み干してくれ。これも、前夜の送別宴で十分に歓を尽くし、今朝はもう別れるばかりなのに、「更」にもう一杯飲んでくれと勧めていることが分

かる。意味上は、「尽」の目的語は「一杯酒」であるが、詩の訓読は原詩のリズムの切れ目（七言詩は２＋２＋３もしくは４＋３）を考慮することが多く、この場合も「更尽二一杯酒一」とは訓読しないのが通例である。

4陽関　中国本土から西域に出る所の関所。現在の甘粛省敦煌市の西南にあった。玉門関の南に当たる。ここを西に出ると、荒涼としたタクラマカン砂漠で、もはや人煙の絶えた絶域と意識された。

4故人　古くからの友人。現在、我が国では「亡くなった人」を意味することが多いが、そういう意味ではないことに注意。

鑑賞

学習活動のポイントでも示されているように、この詩は前半二句と後半二句が対照的な描写（叙景と語りかけ）になっているのが基本構造である。もう少し細かく見ていくと、起句はまず「渭城」全体の朝の雨上がりの情景を描き、承句で送別の場所である「客舎」に視点が絞られ。承句の「青青」「柳色新」から春の情景であることが明示される。さらに転句で「君」と向き合って別れ酒を酌み交わしている場面へと至る。つまり起句から承句へと視点がクローズアップされていることにも注意を向けさせたい。

結句は情景が想像の力を借りて西域までに及ぶ。旅人が向かう方向が西であること，「陽関」という西域の場所が示され、起句の「渭城」と呼応するのである。「無故人」の「故人」は当然のことながら見送る王維自身をも含む。また、明示はされないが，西域には春であっても朝に地面を潤す雨も青々とした柳もないであろうことを踏まえるなら、「故人」はただ人を指すのではなく、慣れ親しんだ自然をも象徴的に包摂すると考えてもよい。

勧レ酒ヲ　于武陵

作者

于武陵

生没年未詳。晩唐の詩人。名は鄴。「武陵」は字だが、通常、字で呼び習わされている。八一〇年に生まれたという説が有力だが、没年は不明。杜曲（陝西省西安市近郊）の人。大中年間（八四七年〜八五九年）、進士に及第したが、官僚生活になじめなかった。その後、官職を捨てて諸国を巡り、嵩山（河南省登封県の北）の南に隠れ住んだという。「于武陵詩集」一巻がある。

出典

唐詩選

七巻。明の李攀竜が編集したとされる唐詩の選集。唐詩四百六十五首を詩体別に編集したもの。李攀竜（一五一四年〜一五七〇年）は、字は于鱗、号は滄溟。山東省済南の人。明代中期以降の文壇の主流となった「嘉靖七子」（「後七子」とも呼ぶ）の中心人物。詩の価値を決定するのは「格調」（詩文の風格と調子。詩形・リズム・修辞などを通じて、詩の外に現れるおもむき）であるとし、格調の最も高いものとして盛唐の詩、ことに杜甫・李白を評価し、「文は秦漢、詩は盛唐」という主張をした。その主張に沿って、盛唐を中心とした唐詩の選集「唐詩選」が刊行された。「唐詩選」は、五言古詩十四首、七言古詩三十二首、五言律詩六十七首、五言排律四十首、七言律詩七十三首、五言絶句七十四首、七言絶句百六十五首、計四百六十五首からなる唐詩の選集である。作家の数は、合わせて百二十八人。最も多く作品を選ばれているのは杜甫で、五十一首。以下、李白三十三首、王維三十一首、岑参二十八首と、いずれも盛唐の詩人である。中・晩唐詩は格調が低いとして極端に冷遇され、白居易・杜牧にいたっては一首もとられていない。選ばれた作品は、雄渾にして壮大なものが多く、明・清代の中国や江戸時代の日本に大きな影響力を持った。ただし、「唐詩選」は偽書で、李攀竜が歴代の詩を選んで編集した「古今詩刪」から唐代の一部分を抜き出して出版したものである、等という説もある。そうであるとしても編者は同じであり、李攀竜の説に沿った、手頃で優れた唐詩の選集として評価され、現在も愛読されている。「勧酒」は巻六所収。本教科書は、明治書院「新釈漢文大系　唐詩選」（目加田誠著）によった。

主題

黄金の杯に酒をなみなみと注いで、別れてゆく友に勧める。「君よ、どうかそれを断らないでくれ」と、人生には別れがかりが多いから、一緒にいる今を共に楽しもうとする思いを歌った。

構成

第一（起）・二（承）句…友人に酒を勧める様を描く。

第三（転）句・四（結）句…酒を勧める理由が、人の世には別れが多いからだと、自分の思いを述べる。

〈詩形・押韻・対句〉　詩形―五言絶句。　押韻―「屣」（第一句）・「辞」（第二句）・「離」（第四句）。上平声四・支韻。

訓読と現代語訳

①君に勧む　金屈巵
②満酌　辞するを須ゐず
③花発きて　風雨多し
④人生　別離足る

①君に勧めよう、この黄金の杯を。
②なみなみと注いだこの酒を君よ断らないでくれ。
③花がひらけばいつでも雨風が吹き散らす、
④人生も、別れがかりが続くのだ。

学習活動のポイント

学習活動のポイント

❶ 詩の黙読。その後、範読を聞く。
❷ 一斉読み。その後、指名によって音読する。

展開

❸ 詩の書き下し文を完成させる。知技(2)ウ
❹ 正確に現代語訳する。〔「言葉と表現」1〕
❺ 華やかな感じの言葉、悲しい感じの言葉を指摘し、詩の流れを考える。

❻友人に対する思いがどう表現されているか考える。
〔**学習のポイント**1〕
❼全員に訳詩を作らせ、数名が発表する。
❽詩形・押韻について確認する。

❶「不レ須レ辞」「足二別離一」など、生徒には読みにくい箇所なので、印を付けさせる等して、正しく音読できるようにする。
❸数名を指名して板書させ、訂正箇所があれば指摘する。
❹漢和辞典を引いて、一応の訳を作る。全体の半分ほどは指導者が訳し、残りを生徒に訳させる等の方法をとってもよい。
❺言葉・表現から受ける印象を整理させる。
華やかな印象の言葉―「金屈巵」「満酌」「花発」
悲哀を感じさせる言葉―「多風雨」「足別離」
右のような形に最初から分けて、該当する言葉を探させてもよい。また逆に、右の言葉を指導者が指摘して、その印象を生徒に聞いていって、分類してもよい。
全体として、華やかな（華やかさを追い求めている）前半から、心の底にある悲哀を語り出す後半への展開が分かって来る。
❻❺を参考に、前半と後半の関係を考える。前半では、盛んに酒を勧める様が描かれる。それについて、なぜこれほど（一見無理強いのように思われるほど）酒を勧めるのか、と考えさせ、後半がその理由を語っていることに気付かせる。酒を勧めている相手の友人は、おそらく旅立ってゆくのだろう。そのために、「別離足る」という思いが作者の中に募るのである。しかし必ずしも送別の歌と考えず、人生一般の別離の悲哀に苦しんでいるとしてもよい。
❼全員に各自の訳詩を作ってみるよう指示する。
全員の作品を後でプリントするなどして、全体に返す。
本時においては、指名して発表させる。井伏鱒二（いぶせますじ）の訳詩を参考にさせてもよい。
❽押韻している文字に印を付けさせて確認する。

発問例

● 一五〇ページ

問 **宴席の雰囲気を華やかにしている語を一つ抜き出せ。**

答 金屈巵

問 **「満酌」（第二句）について、**
◉中 A どのようなことか。
中 B 意味として適切なものを次の中から選べ。

(ア)宴席に杯がたくさん並んでいること。
(イ)杯いっぱいになみなみと酒を注ぐこと。
(ウ)多くの人の杯を次々と飲みほすこと。
(エ)何杯もつがれた酒を飲んで酔っぱらってしまうこと。

答 A 杯いっぱいになみなみと酒を注ぐこと。
B (イ)

問 **「不レ須レ辞」（第二句）とは、どういう意味か。**

答 辞退しないでくれ。断らないでほしい。

補 漢和辞典を引かせる等して、正確に理解させたい。「語句の研究」の例文等も含めて、用例を示して理解しやすいようにする。

問 **「花発多二風雨一」（第三句）は、どのようなことをたとえているのか。**

答 人生では、楽しいときは長く続かず、それを打ち壊すものがやってくること。具体的

語句の研究

● 一五〇ページ

6 勧酒　酒を勧める。人に酒を飲むよう注ぎ勧める意。楽府題（「楽府」は、漢・魏・六朝のころ歌われた民間歌曲。楽府の中で歌曲の題名として固定的に歌われてきたものを「楽府題」という）の一つに「将進酒」（将に酒を進めんとす）があり、その気持ちをとって題としたのだろう。

7 金屈巵　取っ手の付いた黄金製の杯。「屈巵」は、もともと木を円筒状に曲げ、漆を塗るなどした酒器で、ジョッキのように持ち手の付いたものをいう。四〇〇ミリリットルから二リットルほど入るものまであり、概して大型の杯である。黄金製の豪華なものを「金屈巵」という。「巵」は「卮」とも書く。

8 満酌　杯いっぱいになみなみと酒を注ぐこと。また、そのように注がれた酒。「満」は、いっぱいにみちる意。「酌」は、酒を注ぐ意。

8 不レ須レ辞　断らないでくれ。辞退しないでくれ。「不レ須」は再読文字「須」（須カラク…ベシ）の否定形。「須」は、動作や行為の必要性・必然性を表し、「当然…すべきだ」「…するのは当然である」の意。「不レ須」は、多くの場合、再読せずに、「須キズ」と読み、「…する必要はない」「…するに及ばない」などと訳す。さらにそこから、「…しないでほしい」と依頼・懇願する気持ちを表すこともある。ここでは、その意。なお「須ゐる」は、ワ行上一段活用。のちに誤ってハ行上二段活用「須ふ」となった。そのため「不須」を「須ひず」と訓読するものもある。

（例）卿不レ須レ憂レ此。（卿は此を憂ふるを須ゐず。）＝あなたはこれを心配する必要はない。（「三国志」鍾会伝）

9 発　ひらく。花が咲く。「開」と、意味の上でそれほど大きな差はないが、ここには仄声（傾いたトーンで発音される音声）の語が置かれなくてはならず、「開」は、平声（平らかなトーンで発音される音声）なので、用いられず、仄声の「発」が用いられた。また、その韻律上の規則を離れても、「開」が、もともと門扉の開くのをいうのに対して、「発」は、小さくかたまっていたものが外被をはねあげるようにひらき広がるのをいうので、「発」を用いたと考え

には、結句の「人生足＝別離」をたとえていて、親しい人と一緒にいられる時間は短く、すぐに別れが訪ずれることを暗示している。

問　前半の二句と後半の二句は、どのような関係になっているのか。

答　前半二句＝友人に向かって、少し無理強いをするような調子で酒を勧める様子。後半二句＝そのように酒を勧める理由。酒を勧める私の心の思い。

問　補　理由が後半に表されていることに注意する。**この詩の主題として適切なものを次の中から選べ。**

(ア)花も嵐も酒もすべて人生模様だ。
(イ)友人との別れは本当に悲しい。
(ウ)人生は無常だ。
(エ)この宴席で心ゆくまで酒を飲んで楽しもう。

答　(エ)

問　詩形・押韻を調べよ。

答　「構成」参照。

鑑賞

四句すべてが2＋3のリズムで構成され、相手に対する語りかけになっている絶句であり、表現に難解なところはない。起句と承句は取っ手がついた黄金の比較的大きなさかずきである「金屈巵」が「満酌」であること、さらにそれを断らないでほしいと酒をすすめる様子から、豪快に酒を酌み交わし合う情景が浮ぶ。一方後半は、人の生には別れがつきものだからこそ、いまのこの出会いを楽しもうという感情がその底流にあることが示される。後半があることによって、前半の情景の印象がさらに強まる。

結句の「人生」はそのまま熟語ジンセイとして読まれることが多いが、「花が咲けば風雨が起こることが多いように、人が生きれば別離が多い」のように対句になっていると考えるのが自然であり、「人 生くれば」と訓読することも可能である。つまり「花」「人」、「発」「生」、「風雨」「別離」がそれぞれ対応しているのであり、「風雨」は、それによって花が散ることを含意している。この点の理解については、「四季」の項の「春暁」を参照することも有効であろう。

なお、「多」「少」は、「有」「無」など存在を示す動詞に準じて存在の多少を示す場合があり、「有」「無」と同様に、存在する事物の前に置かれる。そのため、ここでは「風雨多」ではなく「多風雨」となる。「足」はここでは「多」と同義。

られる。

10足　多い。「足」は、もともと、充実していること。十分にそなわっている意。そこから、多い意となった。訓読では「足ル」と動詞で読むが、解釈上は形容詞。

(例)　山空　足レ雲。(山は空しきも　雲足る。)＝山はひっそりとしているが雲が多い。(李白「荊州歌」)

参考「コノサカヅキヲ…」　作者は井伏鱒二。明治三十一(一八九八)年～平五(一九九三)年。日本の小説家。本教科書は、『厄除け詩集』(講談社、一九九四年)によった。

【絶句ー望郷】

涼州詞

王翰

作者

王翰

六八七年頃～七二六年頃。盛唐の詩人。字は子羽。晋陽（山西省太原市）の人。睿宗の景雲元（七一〇）年進士に及第。秘書正字等を経て駕部員外郎に進んだが、張説の失脚とともに中央を追放され、最後は道州（湖南省）の司馬で没した。豪放な性格で、酒や博打を好み、名馬や美妓を集めて狩猟や宴会に明け暮れたという。雄勁で情感に満ちた辺塞詩を残している。

出典

唐詩三百首

六巻。清の乾隆二十八（一七六三）年、孫洙編の唐詩の撰集。唐詩三百十首を詩体別に分けて編集したもの。編者の孫洙（蘅塘退士）については伝がなく、生涯の詳細は不詳である。「唐詩三百首」は、「唐詩選」が圧倒的に盛唐詩を重視して中晩唐詩をほとんど切り捨てたのに対し、各時代より公平な視点で詩を選んでいる。そのため、「唐詩選」には名前さえ登場しない白居易・杜牧らの作品も、「唐詩三百首」には前者が六首、後者が十首採録されている。韓愈・元稹・李商隠・温庭筠らの作品も、「唐詩選」では一、二首しかとられていないが、「唐詩三百首」にはそれぞれしかるべき数の代表作が採録されている。このため中国では唐詩の選集としては「唐詩三百首」のほうが重視され、日本でもその傾向が強まっている。「涼州詞」は七言絶句の部所収。本教科書は、平凡社「東洋文庫　唐詩三百首3」（目加田誠著）によった。

要旨

ブドウ酒を飲んで私が酔いつぶれても笑わないでくれ、出征した将兵は生還できないかもしれないのだから、と辺塞の悲壮な思いを歌う。

構成

第一（起）・二（承）句…葡萄酒を飲もうとすると、馬上で琵琶を弾く音が聞こえる。（作者の行為と知覚）

第三（転）・四（結）句…昔から戦争に行って無事に帰った者など多くないのだから、こんなふうに酔って砂漠に寝ても笑わないでくれ。（読者への語りかけ）

〈詩形・押韻・対句〉 詩形―七言絶句。　押韻―「杯」（第一句）・「催」（第二句）・「回」（第四句）。上平声十・灰韻。

訓読と現代語訳

涼州詞

①葡萄の美酒夜光の杯
②飲まんと欲すれば琵琶馬上に催す
③酔ひて沙場に臥すとも君笑ふこと莫かれ
④古来征戦幾人か回る

涼州詞

① 葡萄の美酒を夜でも光り輝く玉の杯で、
② 今しも飲もうとすると、（誰かの演奏する）琵琶の音が（私を）せきたてるように馬上でおこる。
③ 酔って戦場となった砂漠の砂に臥し倒れようとも、君よ私を笑ってくれるな。
④ 昔から遠征して戦った者は、いったい幾人無事に戻ってくることができただろうか（いや、どれほども無事に戻ってきてはいない）。

学習活動のポイント

展開

学習活動のポイント

❶ 詩の黙読。その後、範読を聞く。
❷ 一斉読み。その後、指名によって音読する。
❸ 詩の書き下し文を完成させる。[知技(2)ウ]
❹ 正確に現代語訳する。**〔「言葉と表現」1〕**
❺ 第一・二句について、その華麗なイメージを理解する。
〔「学習のポイント」1〕
❻ 第三・四句について、表現の転調の様子を理解する。

〔「学習のポイント」1〕
❼ 詩形・押韻について確認する。

❹難解な語句はほとんどないので、指名読み後、ただちに現代語訳させてもよい。詩の韻律を尊重し、説明的にならない現代語訳を工夫させ、互いに評価し合うなどする。
❺「起承転結」の構成について、確認する。
❼押韻している文字に印を付けさせて確認する。

発問例

● 一五一ページ

問　**「琵琶馬上催」（第二句）とは、どのような意味か。**

答　誰かが琵琶を馬上で演奏し始めるのだが、それが私に対して「ブドウ酒を早く（もっと）飲め」とせき立てている（ように聞こえる）。

補　「出発するぞ」とせき立てている、との説もある。また「催」を「もよほス」と読む説もある。「語句の研究」参照。

問　**第四句の「古来征戦幾人回」という語句は、前半の二句とどういう関係があるのか。**

答　華麗な杯でブドウ酒を飲もうとする兵士の姿を描いた前半の二句は、それだけ見ればいかにも華やかなのだが、実は第四句に示される「死への怖れ」を抱いていたがために大量の酒を欲していたのである。

補　前半の華麗さの理由が、後半の二句、ことに第四句によって示される。鮮烈な表現手法である。

問　**この詩の詩形と押韻を調べよ。**

答　「構成」参照。

語句の研究

● 一五一ページ

2 涼州詞　涼州（現在の甘粛省一帯の地）から流行した楽府歌曲の名。西域の風物や情緒を歌うことが多い。題名は、原本では「涼州曲」となっているが、「全唐詩」「唐詩選」に従って改めた。涼州は、唐代には河西節度使が駐在したシルクロードの要衝の地で、吐蕃（とばん）・突厥（とっけつ）などの民族に備える前線基地だった。唐の玄宗の時、辺地から献上された楽曲の一つに涼州曲があり、その替え歌が多く作られ、「涼州曲」「涼州詞」として流行した。この作もその中の一つ。

3 葡萄美酒　西域産のうまいブドウ酒。ワイン。唐代には、シルクロードを通じて西域から流入したエキゾチックな高級酒だった。

3 夜光杯　夜でも光り輝く玉の杯。また一説に、ガラスの杯。カットグラス等のガラス器も、西域から流入していた。

3 琵琶　西域の弦楽器。胴はなす型、表は平らで背は丸く四弦四柱。インドから西域を経て中国に入り、日本には奈良時代に伝来した。また五弦五柱のものもある。

3 催　うながす。せき立てる。「早く（もっと）飲め」、あるいは「出発するぞ」と、せきたてる意。一説に「もよほス」と読み、琵琶の音色が起こる、かなでる意。いずれにしても、その琵琶の音色は人の心をかきたてるものとして描かれていると言えよう。

4 酔臥二沙場一　「沙場」の解釈は、単なる「砂漠」とする説と「戦場」とする説がある。特に唐詩の用例として、「砂漠」に「戦争」のイメージを重ねたものは多い。この詩でも、「沙場」に兵士が「（酒に）酔って臥し倒れる」というのであるから、「戦場となった砂漠」とした。

4 君莫レ笑　「君」に関しては、「軍中の周囲の人」とする説と「広く世間の人」とする説がある。これは、第三句を「兵士の言葉」ととるか、「詩の語り手（作者）の言葉」ととるかという問題とも関連して考える必要がある。「君」は確かに二人称への呼びかけであるので、「戦場の兵士が軍中の周囲の人々へ訴える言葉」と解せるであろう。だが、この詩そのものが楽府題によるものであること、「涼州」がシルクロードの要衝の地であり、辺塞の要としてのイメージが濃厚であること、といった二点から考えると、戦場の一兵士の言葉に仮託し

た、詩的客観性を具えた表現であると考えるのが妥当であると思われる。この仮託は「欲レ飲」の第二句にも表れ、辺境の地で戦う兵士の悲哀を物語るものとして有効に機能するであろう。第二句から第三句にかけては、まさに戦場での兵士の行動に即した表現であり、詩中に一兵士の言葉を物語的に挿入したかのような趣である。第一句が西域文物の羅列、第四句が戦争における一般的悲哀感が述べられているのに対して、この一人称的仮託による戦場兵士の言葉の臨場感が、この詩の表現に豊かな味わいを添えていると考えておきたい。

4 征戦　遠征して戦うこと。いくさ。出征。

句法

酔臥二沙場一君莫レ笑　禁止形。「莫」は「なカレ」と読み、禁止を表す。「…してはいけない・…するな」の意。

古来征戦幾人回　反語形。「幾人（カ）……」の形で、「いくにんカ…」と読み、「いったい何人が……か、いや、どれほども……ない。」の意。

鑑賞

「涼州詞」という詩題、「葡萄美酒」「夜光杯」「琵琶」「沙場」等の西域に特徴的な語彙によって詩が彩られる。前半は戦さの合間に兵士たちが短い安息を楽しむ情景が、起句では視覚によって、承句では聴覚によって浮かび上がる。転句の「君」は戦場からの読者への呼びかけを含み、結句と併せて、前半の情景が生死の行方もしれない戦場ならではの刹那的なものとして再び輪郭づけられる。このように前半の情景が後半の叙述によってさらに印象を深める構成は、前出の「勧酒」にも通じていることに注意したい。

なお、「君」が誰を指すかについては、戦場の仲間の兵士が読めばその兵士であるし、首都長安にいる友人が読めばその友人が「君」であり、また、時代を離れてこの詩を手にした者が読めば、その人が「君」である。つまり、この「君」は読者を得て初めて決定されるものである。そのようにして、読者がまるで西域の戦場に立ち合っているかのような感覚を与えることに成功している。

またこの詩における西域のイメージについては、安藤信廣「漢文を読む本」（三省堂、平成元年）一三一ページに次のようにあるので、引用しておく。

> 強烈な葡萄酒、光るカットグラス、狂おしくかなでられる琵琶の音色。これらは皆、中国内地の日常生活にはない異国情緒にみちみちている。それは彼ら兵士達が、遠く内地を離れた異境で妖しくも不安な日々を送っていることを示す。しかし兵士はそのように物狂おしい感覚の世界を、今必要として欲しているのである。彼らは酔わなければならないし、音楽に恍惚としなければならない。そうでなければ、異国の「沙場」に明日は自分の死体が横たわるのかもしれないという冷酷な現実を、否応なしに想像してしまうのだから。つまり饒舌なまでに繰り返される異国情緒は、絶域にある兵士達の現実であると同時に願望でもあるのだ。

酔いつぶれたためか、酔った勢いで戯れているのか、兵士は砂漠に寝ころがる。そしてそうしながら、彼の言葉は醒めている。「どうか笑わないでほしい、昔から生きて帰国した出征兵士が何人いたというのか」と。酒と音楽に酔おうとして、それを飢えた獣のように欲していながら、彼は身に迫る死を片時も忘れてはいない。忘れられないのである。デカダンスを求めるのが、しばしばあまりにも覚醒した知性であるように、あまりにも肌近く死を感じている兵士の異国情緒の中に全てを忘れようと苦闘している哀切さが、この詩の生命であろう。そしてまた、そのような哀切な体験と妖しい異国情緒を、一種の強烈な民族感情というべきものにしてしまっている所に、時代の骨太さを見ることができるだろう。

静夜思

李白

作者

李白

七〇一年〜七六二年。字は太白。号は青蓮。盛唐の詩人。自由奔放な詩風で、道教を信奉し「詩仙」と呼ばれた。大胆な発想と自由な表現で、盛唐を代表する。隴西成紀（甘粛省天水県）の人とも、山東（山東省）の人ともいわれ、また西域の出身とする説などもあるが、蜀（四川省）で生まれ育ったとするのが有力である。父は、西域との通商をしていた大商人だったと考えられている。十五歳の頃から剣術を学び、詩文も制作するようになっていた。二十歳の頃には蘇頲に認められてもいる。早くから任侠と酒と美女を愛し、各地を放浪した。二十七歳の頃、安陸（湖北省）で結婚したが、三十五歳の頃太原（山西省）に旅行、任城（山東省）に住んで新たに結婚して一男一女をもうけた。後、江南に旅立ち、会稽（浙江省）で道士の呉筠と知り合って、仙術の修行をするが、呉筠が玄宗皇帝に召されて長安にのぼると、呉筠の推薦によって、天宝元（七四二）年、李白も都に出た。玄宗に仕えて翰林院供奉となり、賀知章から「天上の謫仙人（天上から人間の世に流された仙人）」と評されたりした。天宝三（七四四）年、あまりにも豪放不羈な性格だったために長安を追放され、河南・山東の地を放浪し、杜甫や高適らと交流した。天宝十三（七五四）年、宣城（安徽省）に住んだが、翌年、安禄山の乱が起こり、玄宗の第十六皇子の永王璘の安禄山討伐軍に参加する。しかし永王の行動が兄粛宗皇帝から反乱行為と断定され誅殺されると、李白も罪を問われて夜郎（貴州省）に流された。途中、巫山（四川省）付近で赦免され、長江を下って江蘇省の辺りを転々とし、宝応元（七六二）年、当塗（安徽省）県令李陽冰の家で没した。天才的で卓越した想像力と自由奔放な表現力、大胆で豪放な構想など、全ての面で盛唐の気風を体現した詩人なので、杜甫を「詩聖」と呼ぶのに対して「詩仙」と呼ばれるのである。杜甫は、「春日憶二李白一」詩のなかで、「白也詩無レ敵、飄然思不レ群」と称えている。ことに絶句形式に才能を輝かせ、律詩を得意とした杜甫と並べて「李絶杜律」と評される。「李太白集」三十巻がある。

出典

唐詩選

「勧レ酒」の「出典」参照。「静夜思」は巻六所収。

主題

静かな秋の夜更け、寝室を照らす月に、望郷の思いをかきたてられた心情をうたう。

構成

第一（起）・二（承）句…眼前の景色をうたっている。（叙景）
第三（転）・四（結）句…作者の心情をうたっている。（叙情）
〈詩形・押韻・対句〉 詩形―五言絶句（詩家によって楽府として取り扱う向きもある）。
押韻―「光」（第一句）・「霜」（第二句）・「郷」（第四句）。下平陽韻。　対句―第三句・第四句。

訓読と現代語訳

①牀前　月光を看る
②疑ふらくは是れ　地上の霜かと
③頭を挙げて　山月を望み
④頭を低れて　故郷を思ふ

①（夜が更けて辺りは静かであるが、旅先の身ではなかなか寝つけない。そこで起き上がり）ふと寝台の前を見ると月の光が明るく差し込んでいる。
②その月の光は白々としているので、（もう秋も深まっていることゆえ、初めは）おや、地上に降った霜ではないかと思ったほどであった。
③（だが、よくよく見たら、霜ではなかった。そこで）頭を上げて山の端に昇っている月を仰ぎ見た。
④（するとおのずと故郷のことが思い起こされて、旅愁がひしひしと胸に迫り）頭はいつともなくうなだれて、（私はいつか）望郷の念に浸っているのであった。

学習活動のポイント

■ 展開

学習活動のポイント

❶ 詩の黙読。その後、範読を聞く。
❷ 一斉読み。その後、指名によって音読する。
❸ 詩の書き下し文を完成させる。[知技(2)ウ]
❹ 正確に現代語訳する。
❺ 作者のいる具体的な状況を想像してみる。
❻ 詩形・押韻について確認する。

❶五言詩の素朴な韻律を意識して範読する。読む「間」も詩の響きを引き立てる要素であることを指導する。

❷内容を考えながら丁寧に読むよう指示する。
❸数名を指名して板書させ、訂正箇所があれば指摘する。
❹現代語訳にあたっては、「疑是」の「うたがう」が現代日本語では否定的な語感をともなうことが多いのに対し、漢詩では「…ではないかと思う」「まるで…かのようだ」の意味で用いられることが多いことに注意させる。「語句の研究」参照。詩の韻律を尊重し、説明的にならない現代語訳を工夫させ、互いに評価し合うなどする。
❺詩人の境遇を調べるなどして、故郷への思いがどのようなものであったかを想像し発表したり話し合ったりする。
❻押韻している文字に印を付けさせて確認する。

■ まとめ

学習活動のポイント

❶【送別】【望郷】の詩について、まとめの学習活動を行う。[思判表B(1)イ・ウ] [主態]〔**言語活動** 1〕
ア 送別の二首に見える「君」が誰を指すかに注意する。
イ「涼州詞」の「君」が誰を指すか、詩の読者を想定しながら、考える。
ウ「静夜思」における月光がどのような働きをしているかを考える。

❶**ア**…どちらの「君」もこれから旅立つ友人を指している。送別の場の情景を描く詩であると同時に、友を送る情を友に伝えて贈る詩であることに注意を促す。
イ…「涼州詞」の「君」は、この詩が誰に向けて書かれているかによって解釈が異なる。もし、仲間の兵士に向けてだとすれば、「君」もまた苦楽を共にする仲間だということになる。

だが、辺境の戦場の悲哀を都会にいる読者に伝えようとしたものであれば、「君」は不特定であり、遠く離れてこの詩に接する読者ということになる。二つの解釈は互いに排除するものではなく、むしろ読者によって決定される。「涼州詞」の「解説・鑑賞等」を参照。

ウ…漢詩においては、古くから、月が離れた土地にいる人同士の思いをつなぐものとして描かれてきたことを確認する。また、その影響を受けつつ、和歌においてもやはり月が重要な役割を果たしていることにも触れる。李白とも親交のあった阿倍仲麻呂の名歌「天の原振りさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」などは好例となろう。

【評価】「言語活動」1を行い、詩の舞台や誰に呼びかけているかを比較し、その違いについての話し合いを積極的に行っているか、発言や行動を確認する。

発問例

問 **この詩が作られた(1)季節と、(2)時刻とを、その根拠をあげて答えよ。**

答 (1)「地上霜」とあるから「秋」。
(2)「望二山月一」から「夜更け」。

補 景物の季節感や時刻の古典常識を確認する。

問 **「地上霜」（第二句）は、何をそう疑ったのか。**

答 月光。

補 寝台の前の輝きを見て、「霜が降りたのではないか」と思っているのである。「疑」は、驚きを含む比喩に用いる。「疑わしい」の意味ではないことに注意が必要。

問 **なぜ「霜」（第二句）と思ったのか。**

答 月光がまるで霜がキラキラ光るように白く輝いて見えたから。

問 **「疑　是地上霜」（第二句）の現代語訳として適切なものを次の中から選べ。**
(ア)月の光を見ると、故郷の地に降りた霜の白さを思い出す。
(イ)月の光はまるで地上に降りた霜のように思われる。
(ウ)月の光に照らされた地上に霜が降りている。
(エ)月の光は銀色に輝き霜に覆われている。

答 (イ)

問 **作者は山月を仰ぎ見ながら何を思い出しているか。**

答 故郷のこと。

問 **「低レ頭」という表現を参考にして考えると、第四句に込められた作者の心情は、どのようなものか。**

答 遠い故郷の月夜のことを思い、人々への思いをはせる心情。

補 「牀前」に「月光」を見た瞬間の驚き（第一句）からそのきらめきを「地上霜」のようだと認識する（第二句）までの時間は流れるように描かれている。だが「挙レ頭望二山月一」（第三句）と上を向く視線が描かれ、詩は大きく転じる。そしてそれと対句を形成する「低レ頭思二故郷一」で、鮮やかに視線の再度の逆転が描かれ、故郷への深い思いが印象的に浮かび上がるのである。

問 **作者はこの詩をどのような状況にあって詠んでいるのか。**

答 故郷を離れた旅先の身で、なかなか寝つけないままに山月を仰ぎ見ながら望郷の念に浸っている状況。

補 これ以上ないほどの秋の静けさが周囲に満ちていることも指摘できる。

問 **叙景の句と叙情の句、及び対句を指摘せよ。**

答 叙景の句＝第一・二句。叙情の句＝第三・四句。対句＝第三・四句。

語句の研究

●一五一ページ

6 静夜思　古くからある楽府の題。楽府題（古く楽府に採録された詩歌の題）になぞらえて李白が作ったもの。静かな夜のもの思いの意。「唐詩三百首」では「夜思」と題されている。

7 看二月光一　「唐宋詩醇」「唐詩三百首」には「明二月光一」に作る。中国の古典詩には、故郷を離れている人の見る月は、故郷の家族も同様に眺めていることだろう、という望郷の念と結び付いて歌われる場合が多い。百五十年ほど後の我が平安前期の歌人による、「月見れば千々にものこそ悲しけれ我が身一つの秋にはあらねど」（「古今和歌集」巻四、大江千里）を思い起こさせる。

7 疑是　〈疑フラクハ〉は、疑うことにはの意。「ク語法」による名詞化の訓読。「疑ふらくは」という上代語の読み方に注意する。「…らく」は、上の活用語を体言化し、「…すること」の意味を表す。「是」の用法は、認定の繋詞として英語の be 動詞に相当する働きを持ち、六朝から後、現代語に及ぶ。「疑是…」で、「…ではないかと思う」の意。

問 **詩形・押韻を調べよ。**

答 「構成」参照。

推量を表す。このように、漢詩では「疑」は不信の意ではなく、推量や比喩を導く語として機能することが多く、現代日本語の「うたがう」とは語感が異なる。「疑是銀河落二九天一」（李白「望二廬山瀑布一」）や「山重水複疑レ無レ路」（陸游「游山西村」）などが例となろう。

8 山月　「唐詩三百首」に「明月」に作る。

そのまま故郷に思いを馳せるのではなく、月から視線を外して故郷を思うところに、この詩の妙味はあるだろう。李白が「低頭」と言うのはなぜなのか、詩の中に答えはなく、読者の想像に委ねられている。

鑑賞

この詩の本文については、「語句の研究」に示されたように、起句と転句に異同があるが、ここに採用した本文が古く、かつ日本でも通行している。「唐詩三百首」など中国で通行している本文は明代以降に改変されたものであり、ここでは考慮しない。

起句と承句は、ベッドの前に差し込んだ月光にはっと気づいたさま、それがまるで霜が降りたように見えたさまが印象的に描かれ、読者を引きつける。季節は明示されないが、霜という語からは秋冬の冴えた月光を思うのが自然であろう。月と霜の対比は、李白「長信宮」に「月皎昭陽殿、霜清長信宮」と見えるところでもある。いずれにせよ前半の要点は、月と霜を結びつけて、夜半に室内を照らす月光の鮮烈さが描写されるところにある。

後半は、月は天空に浮ぶものとして、故郷を想起させる存在に変貌する。送別の「勧酒」のように承句と転句は対句になっているものの、この二句では一連の動作として描かれる。月を望んで